L・a・n　～漢志～　「張世平 伝」　奇貨

玄徳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌ・ａ・ｎ　～漢志～　「張世平　伝」　奇貨

【Ｎコード】
Ｎ４２００Ｉ

【作者名】
玄徳

【あらすじ】
舞台は中国、時は漢王朝・第２５代皇帝：劉宏の御世。
冀州中山国出身の馬商人：張世平は「奇貨」を得る事を夢見て、日々行商に勤しんでいる。昨今、黄巾党と呼ばれる政治集団が跋扈する中、娘婿：蘇双を連れて太行山脈を越えようとしていた。

太行山脈を行く、張商団

「大丈夫、かくの如く成るべき也。」

一介の無頼漢たる劉邦が中国のファースト・エンペラーたる始皇帝を覧じて、吐いた言葉である。
それよりまもなく、己以上の英才と人民の希望を頼みに自身の国を打ち立てたのであった。

～漢王朝～

以来４００年…、先人達の志は神の如く崇め奉られたが
それ故に時と併せて世人の生活から乖離(かいり)してゆき、
ただ欲望が統制なく縦横することとなった…

漢の中平元年一（西暦１８４年）
崩れ出した大宇宙の終焉を宣言すべく、一つの“乱”が齎(もたら)されたのである。

「黄巾の乱」

党首：張角(ちょうかく)率いる黄巾党と大将軍：何進(かしん)が采配する漢・近衛軍との戦いは漢土に住まう全ての人間を“走らせる”事となった…

冀州(きしゅう)と幽州(ゆうしゅう)の州境

険しい山々に囲まれた街道に数百頭の馬群を引き連れる一団があった。
団長の名は張世平（ちょうせいへい）、中山国（ちゅうざんこく）で馬商いを生業としている。
元々は細々と農耕馬を売るのみであったが、ここ十数年叛乱・暴徒の続発により軍用馬として売る事で多大な利益を上げていた。

「この地も随分荒れ果てたものよな。。」
張世平（ちょうせいへい）は景色を眺めて呟いた。
上谷郡は荘厳な山々に囲まれてはあったが、その山々より守られてか緑も映え、時より照れた様に顔を出す草花が旅人の目を和ませたものであった。今、その道は荒れ草木はひしゃげ、山肌は所々黒く焦げている。
その世の虚しさを心に留め押し殺し、商人（あきんど）としての至上を志に張世平（ちょうせいへい）は漢土北方を歩き続けてきた。

奇貨（きか）を捜し求めて。

商団は緊張感に満ちていた。
今や“暴”を振るう者達にとって馬は垂涎（すいぜん）の的である。
道全て“暴”が伏せられていると考えなければならなかった。
その為予め、
どの道を選べば暴徒に遭わずに済むか、
どの時を選んで歩を進めるか、
難路を武装し越える商団は並の暴徒より遥かに優れた一個団といっても差し支えない。

この内、斥候及び先頭を執っているのが、娘婿の蘇双(そそう)である。
彼は緊張していた。団の先頭を司るといっても武人ではない身にとっては名誉など与(あずか)り知らぬこと、最早道端の草花に目をやる余裕など持てぬ日々である。今日も目を皿にして三方を見やると、街道の彼方より砂塵が舞い上がっている。途端に蘇双(そそう)の顔面はキリリと引き締められた。砂塵の果てに三頭の馬が見える。三方へ放った斥候が合流したのであろう。先頭よりの号令一家、団を止めると蘇双は屈強な若党を左右に侍らせ報告を待ち受けた。

「街道の様子はどうだ？」

斥候達が着くや否や間髪入れず問う蘇双(そそう)、

「へいっ、あと十数里程で隘路を抜け盆地に入るかと思われます。」

「賊徒などは？」

「今の所、怪しいのは見かけやせん。　ただ…」

「ただ？ただが何だ！？」

「へいっ！盆地の手前が丘陵深うごぜえやして茂みも多うございやす。ですので…」

斥候は説明順番を誤ったと思い、口篭ってしまった。よって、

「賊が居るかもしれんと言わんかっ！」

「へ、へいっ！！」
蘇双(そそう)は歯軋りさせて握り拳で腿(もも)を一打ち、脂汗が握られている。
そして、素早く馬首を返すと
「私は旦那様にお知らせして参る。お前達は四方を見張っておくように。」
「へい！」
斥候・従者に吐き捨てて、義父の居る中央へ馬を走らせたのだった。

隊の連中はさて休憩かと一息吐きだしていたが、己の腿(もも)を打ち据えながら奔り来る蘇双(そそう)の早馬に、不測の事態を思い気を昂らさせる事となった。

太行山脈(たいこうさんみゃく)より吹き降ろす颪(おろし)は不気味な音を放っている。
張世平(ちょうせいへい)、馬車より降りると、火を起こさせ湯を沸かし「茶」の用意をしていた。
茶とはいっても現代の様な嗜好品とは程遠く、高貴な非常食と云えるものである。

書に曰く
「まず茶葉を重湯でもって粘りを出させ、餅の形にし、飲む際は表面が赤くなるまで焚き、削り挽いて粉末にする。お湯を注いだらば上に葱や生姜、蜜柑を散らして飲むところとなった。酔いと眠気を覚ます効用があったらしい。」

張世平(ちょうせいへい)は乾燥させた団子状の粟を茶入りの器に入れ、熱湯を注ぎこそいで食べた。

「ふむ、もう少し生姜を擦っても良いかの。」

空を見上げて人心地、この高額品の味わい方を考えるのが張世平(ちょうせいへい)の密かな楽しみであった。床几(しょうぎ)に腰掛けた身に跪いて構える従者達にも少々振舞い共にひと時を楽しむ。だが、「茶」の味に馴染めぬ彼等は一様に引きつった笑顔を見せるばかり。
それを見て張世平(ちょうせいへい)、高笑いして

「これほど、皆が顰め面しておるのに、一級品とはなぁ、高貴な方々は舌が馬鹿なのかもしれませんねぇ。」

従者達一同、吹きだして返す。

「旦那様ぁ、そんじゃあ旦那様の舌もオカシイのでございますので??」

「そうですねぇ、うっかり富貴を得ましたからな、何だかすっかり馬鹿な舌になってしまったかもしれん。その内、頭も馬鹿になるんでないかと心配でならぬ。金なんぞ持っても為にならんことだ。」

主の自嘲に対し若輩軽率にも

「なら、旦那様ぁ、私らにお屋敷分けて下せえよぉ〜。」

と嘯(うそぶ)くが

「ははは…。皆馬鹿になったら、商売アガッタリではありませんか。やめとこう、やめとこう。はははは！」

「なんでぇ、旦那、全然馬鹿じゃねえじゃねえか。ハハハハ…」

煙に巻かれて手打ちとなす。凡(およ)そ主従というより一家であろう。乱世故にこそ張世平はこの団欒を維持させる事を何よりの大事としていた。

湯を入れた釜を囲み談笑する一同。

釜よりはほんわかと白く湯気が立ち昇り、

一同の笑い声を空高く上げていった。

一方、

そのすぐ向こうより焦燥含んだ黒煙を上げて奔り来る騎馬こそ蘇双(そそう)。

年少達は慌てて跪き、年寄(おとな)達は気にせず「茶」を啜っている。

張世平(ちょうせいへい)はもう一つ床几(しょうぎ)を用意させると、湯を飲んで端座したのだった。

蘇双(そそう)、主人の足下に寄りて曰く、

「ハァハァ…旦那様、旦那様。。」

疲労と切迫に蘇双(そそう)は上ずってしまっている。

「何だね、婿殿。まぁ、一息吐きなさい。」

と白湯を勧められる。蘇双(そそう)は受け取りぐっと飲み干すと咽(むせ)かえしてしまった。

「ゴハッゴホッ…、失礼を。ご報告致します。これより十数里ほどで盆地に出るようです。目的地は間も無くかと思われます。」

「そうですか、では“長生(ちょうせい)”殿に会うもすぐとゆう事ですな。」

“長生(ちょうせい)”とは古馴染みの客の事である。

「それは重畳(ちょうじょう)。して、その慌て振りはどうしたのです?」

「はい、さればこの先に深い丘陵がありまして、人が隠れるに適した茂みもあるとの事。或いは賊徒が潜んでいたらと思い処し方を伺いに参りましたところです。」

「ふむ、報告は分かりました。…まぁ、掛けなさい。」

蘇双(そそう)はようやく気が付いて、床几(しょうぎ)に腰を下ろした。

「落ち着かれたようだね。やんぬるかなぁ…」

蘇双(そそう)はギクリとして目線を外せなくなった。義父の長説教の始まりを感じ取ったからである。

「そもそも、慌て過ぎです。順番に言いましょう。

まずは斥候からの報告を受ける際は団を止めず動かしたまま受ける事。
これは最初に押さえねばならぬと申したでしょう。
行き止まりでなければ、賊に捕捉される前に走り去るのが良い。
連中の馬では追い着けないからの。
そもそも奴等の目的は私等の馬なのです。飛び道具で疵付けるわけにもいかないし、
道を塞ぎ囲まない限り私等を捕らえるのは難しい。
良いですか？
今の場合もあくまで賊がいる疑いがあるだけで確認出来たわけではないでしょう。
道も開けられたままです。…とすれば、
すべき事は、分かりますね？」
蘇双(そそう)は目を見開いたまま微動だにしない。
年少達は控えながらもクスクスしていた。

「返事は？」

「あ！？ハイッ！」

ようやく気が付いたようだ。

「宜しい。次に指揮者たる者、悠揚と構えねばいけません。
報告一つに砂塵巻き上げて奔走させるは愚の骨頂、馬の身にもなりなさい。
指揮者が徒(いたずら)に慌てると下々は更に混乱するもの、そうなればどうなります？
下々が混乱すれば団としての統制は当然取れなくなります。もしもの事態にどうなるか、

解りますね？」

年寄達はせっせと釜を片付けている。

「…はい。」

蘇双、力なく頷く。

張世平は面持ちを緩め溜め息を吐いて言った。

「…ふぅ。婿殿、余裕を持ちなされ。

指揮者に余裕があってこそ、皆安心するものですからな。私もそう。

婿殿の用心深さはとても素晴らしい事、けれど緩みのない人間は接し辛いものだ。

何があろうとなかろうと、大きく構えなさい。それだけで隊には充分ですぞ。

手段を講ずのはそれからでも遅くない。」

いつの間にか、張世平は優しい微笑みを湛えている。けれど、蘇双は笑顔にはなれない。二十歳駆け出しの入り婿にとっては、そのまま物言いを受け入れる事などまだまだ出来はしなかったのである。

張世平も蘇双の表情を認めると、善後策を伝えて先頭に帰る様促した。蘇双、心定かならぬまま、まもなく立ち上がり馬に跨ろうとした時、

先頭より再び早馬が現れた。

「お伝え致します！前方より馬群の一帯、各々武器を携えており人相、風体より賊の類いかと思われます。ご采配を！！」

事態は現実、焦眉(しょうび)の急(きゅう)となったようだ。

疾走、精鋭騎馬商団

「少し、話しすぎたかの。。」
張世平(ちょうせいへい)はここに到っても思わず、ニヤリとした。
一方、蘇双(そそう)は報告に対し、
「分かった。直ちに対応する。皆に慌てない様、伝えてくれ。」
毅然と言い放ち、颯爽と馬上の人となった。
後ろを振り返ると義父は頼り甲斐ある笑みを湛えている。
「教えた通り、やりなさい。大丈夫。」
と力強く頷いた。
それを見て自身の震えが止まった事を蘇双(そそう)は感じた。
「これが然りか、な。」
同じく頷き返すと、大声を張り腕を振りかざしてきびきびと指図した。
従者達に守られ張世平(ちょうせいへい)、
「やはり経験こそ糧(かて)なりか。」
と呟くと先頭への支援を指示し、矛を構えさせた。
「さて、彼等の門出に傷を付けぬ様にせぬとの。」

いつの間にか太陽は朧(おぼろ)なる雲にその光を飲み込まれていた。

徐々に近付く砂塵を前に蘇双(そそう)率いる先遣隊の動きは慌しい。
従者達はそれぞれ素っ裸の馬に跨(またが)り、腿(もも)を締め、
一斉に己の腰に提(さ)げた紐で括(くく)りし重石を取り出した。
街道とはいえ広さは馬十頭が並べる程度、投石の間隔を鑑みれば五頭が限界であった。
砂塵の向こうにどんよりとした影が見えてくる。
馬上の五人は徐に頭上で石弾を旋回させ始めた。
沈黙の隊に空気を切り裂く乾いた音のみが鳴り響く。
まもなく砂塵より狂声が漏れた。

刹那！

石弾は美しき弧を描き、
空に見とれたその果てで、
牙を剥いて襲い掛かっていった。
狂声に混じる悲鳴、人も馬も薙ぎ倒された。
続いて五人馬、間を縫って入れ替わり、再び弧が描かれる。
一糸乱れぬ行動は、さながら親衛隊と云えようか。
戦時のすぐ後方にも関わらず蘇双(そそう)は思わず唸ってしまった。

「“長生(ちょうせい)”か…あいつは無事かな。」

精鋭商団を創り上げた男の事が不意に思い浮かばれたらしい。

馬上投石は４，５度繰り返されたが、暴徒達は構わず猛進してくる。
食い詰め者の衆にしては勇猛に過ぐとも思われたが、逡巡する間はなく、
蘇双は続いて騎馬突撃の合図を送った。
先頭の騎馬衆、それぞれ喚声を発すと戟を真一文字に構え、
馬を疾走させて行く。

幽州（ゆうしゅう）は鮮卑（せんぴ）―（騎馬民族国家）と境を接している。騎馬民族国家にとって
馬は生活上でも軍事上でも非常に重宝され得る存在であった。
高原でのびのびと育てられた馬は
豊かな鬣（たてがみ）と引き締まった筋肉、戦時にも物怖じしない気性の荒さを
兼ね備えている。これを交易で手に入れ、自らの商品とする。そしてそれは身を守る盾ともなった。

暴徒達にとって前に雹（ひょう）が降り注いだかと思いきや
続いて眼前に閃光が走ったと感じられた事だろう。
迸る閃光群が暴徒の中へ入った刹那、
首が宙に舞い、胴は大地に叩き伏せられた。
但し、足止まらば立ち木も同じ。
敵が混乱している内に馬首を返すと左右に散って走り去った。
騎馬衆の間より続いて湧き出でるは徒歩なる従者達。
一丈の矛を地より地より天へ向けて構える姿は豺狼の如く、餌場へ飛び掛らんとす。
その爪牙は商隊には似つかわしからぬ鋭い輝きを放っていた。
この鋭く輝く武器には張世平（ちょうせいへい）の一つの信念が込められていた。

張世平が求める「奇貨」、それは乱世を鎮める「英雄」の事である。
己が馬達が担う役割を慮った時、
一介の商人から「秦」の宰相へと上り詰めた“呂不韋”が頭を過ぎった。
“呂不韋”の立身出世策こそ即ち「奇貨居くべし」であり、我が馬こそ奇貨を得る代価であると考えた。
財を成した商人の性なのであろう。が、馬のみに頼るのは安易と張世平は考え、それを補填すべく導き出した答えが、「武器鋳造」であった。
漢王朝では「鉄」は政府専売であるが、世の混乱と差別身分たる「商人」という立場が、張世平に機をもたらしたのであった。
中山国豪族・父老達の保護の下、張世平は研究鋳造に没頭し生み出された諸武器は華北（中国北方）豪族・名士達の評判を得るに到った。
しかし、張世平はもっぱら農機具のみを製品とし、武器を売り物する事は厳に慎んだ。
馬術の難易さと比べると武器は扱うに容易な道具であるが故に迂闊な者へ流れて混沌の血肉とされる事を恐れたのである。

こうして秘蔵の矛を手にした従者達は各々が皆、狼と化し当たると幸い暴徒を斬り散らした。
暴徒達の突進はここで完全に止まり、まるで狼が山羊を狩りとってゆくかの様であった。
後ろで戦況を見つめる蘇双は事態の好転に胸を撫で下ろし、商隊の鮮やかな動きに魅了されている。
張世平より追い討ちを掛けない様に言い含められていたが、美しい

戦いぶりに酔っていた蘇双は味方がジリジリと押し込んでいる事に何の用心も感じられずにいた。戦場の均衡は一刻と持たず暴徒はついに潰走、最早完全な狼となった徒歩商隊は大将の命を待たず、獲物へ躍り掛かって行く。

蘇双は疑義を抱く事無く、追認してしまったのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4200i/

Ｌ・ａ・ｎ　～漢志～　「張世平 伝」　奇貨

2010年10月25日03時53分発行